

平成25年度 北海道男女平等参画チャレンジ賞贈呈式 懇談内容

日時：平成26年1月22日（水）15：00～
場所：知事会議室

廣瀬さん

平成3年に、結婚を機に仙台市から富良野市に移り住むようになりましたが、結婚の翌年の平成4年に、夫の父が脳梗塞になり、後遺症が残る生活をしなければならなくなりました。その時に、義母もあまり体調が良くなく、私と二人で義父の介護をしていました。

当時、富良野沿線では介護タクシーがなかったのですが、夫の経営する富良野タクシーが介護タクシーを始めまして、一緒に何かできないかと思い、自宅の車庫を改装して福祉用具販売の店を始めました。結婚前の仕事が観光業だったので、福祉や医療の分野には関わったことがなく、まず資格を取らなければならないのですが、札幌で一週間、9時から5時までの試験を受けなければなりませんでした。

当時、9ヶ月で授乳中の子供がおりましたが、義母は義父の介護があるので、子供は預けられませんでした。家族に相談したら、「みんなで札幌に行きましょう」ということで、札幌のホテルに家族全員で宿泊まりをして、一週間の試験を受講させてもらいました。

それから今まで、ずっと仕事を続けてきましたが、今まで何が一番辛かったかという、受講中にお乳が張ってくるのが大変で、その一週間が一番辛かったと思います。

仕事の中では、男性の仕事だと言われていた住宅改修で、利用者のお宅を訪問すると、「どうして女が来るのか」と言われたことがあり、辛い思いもありました。しかし、女性が参入した新たな分野ということで、何が辛いかわからないまま、今まで来ています。

高橋知事

まずは、慣れない道外から嫁いで来られて、新しい分野にチャレンジされて、お子さんを抱えて、苦勞に次ぐ苦勞だったでしょう。でも、明るいですね。

富良野市は、昨年10月に、富良野マルシェにお伺いしました。次回はずいぶん、廣瀬さんのがんばっておられる姿を拝見させていただきたいと思います。

お父様の具合はどうですか？

廣瀬さん

5年前に亡くなりました。介護していた母も、昨年10月に亡くなりました。

高橋知事

そうでしたか、お悔やみ申し上げます。でも、親孝行されましたよね。

廣瀬さん

一番後悔するのは、外にばかり目を向けてしまって、自分の親に目を向けてあげなかったかなと思っていますが、介護はできたと思っています。

高橋知事

これからも、地域の福祉のためにがんばってください。

では次に、二輪草センターの、センター長の山本さんにまずお伺いしたいのですが、どのような思いで「二輪草センター」という名称にされたのですか。

山本さん（二輪草センター）

二輪草というのは、野草で、北海道も含めて日本全国に生息しており、野草なのでどんどん広がっていきます。また、一つの茎から二つのかわいい花が咲きます。白い花で、白は医療のイメージがあるので、医療人の私たちがやっているような取組が、どんどん広がってほしいという思いがあります。

さらに、一つの茎を我々の病院に例えますと、二つの花は医師と看護師、あるいは父親と母親、私たちの病院が地域社会のようになりまして、子育てや介護を一つの茎が支えるというイメージを持っています。

それと、花びらが5枚ついているのですが、復職の時に使っているプログラムが5段階になっていますので、5枚の花びらを持つ花、北海道にも自生していること、かわいらしくて覚えてもらいやすいということで、シンボルマークにさせていただきました。

平成19年に、文科省の医療人GPという補助金があり、そこに二輪草プランとして応募させていただいたら採用されたので、それ以来、二輪草センターという名称でやっています。

高橋知事

間宮さんは、山本さんと一緒に、マネジメントなどをされているのですか。

間宮さん（二輪草センター）

二輪草センターの立ち上げの時から関わっています。私は、子供を2人育てながら仕事をしていますが、立ち上げの際に、女性医師と、男性の方、病院長など数人が集まって、どのような仕組みにしたいかということ話し合ったのですが、こんなシステムがあったら良いと、どんどん意見を出し合って、それを形にしていってのが二輪草なので、私たちにとっては理想的なシステムだと思っています。

高橋知事

復職と一言で言っても、大変なことだと思います。特に、女性の方が圧倒的に多いと思いますが、いったんリタイアされると、医師でも看護師でも、現場感覚がなかなか戻らないと思われるので、研修みたいなものも当然いるでしょうし、生活のリズムを変えて仕事を続けていくための意識改革も必要でしょうし、大変なこともたくさんあると思います。一番ご苦労されたところは、どういったことですか。

山本さん（二輪草センター）

最初は、休職している人材がどこにいるのか探すことが大変でしたが、同窓会からの名簿をお借りして調査させていただくなどして、最初の数年間で、潜在している人材はだいたい発掘できました。

今は、仕事を辞めないで、細々とでもいいから継続する支援に、シフトしています。一度辞めてしまうと、復職するハードルが高いので、少しでもいいから医療の情報に触れて、週1回でも、あるいは短時間でもいいからというふうに、多様な就業形態を提供することで、辞めずにすむという職場環境を整えています。

また、ワークライフバランスが大事だという意識改革を、学生のうちからすることに力を入れています。若いうちから、男子学生は、将来は医師と父親の立場を当然両立するものだと、育児は女性だけのものではないということに気づいてもらうという授業を3年前から始めたのですが、若いうちから意識を変えることで、男女が共に就業を継続しやすくなり、医師不足の解消がよりスムーズに進むのではないかと考えています。

高橋知事

皆様が対象として考えておられる学生は、女性ばかりではなく、男性の方々も、半々というかんじですか。

山本さん（二輪草センター）

そうですね、6割が男子学生で、4割が女子学生です。

学生のうちから、将来は当然仕事と家庭を両立するものだというので、実際に両立しているロールモデル、父親として医者でありながら育児をしている職員が、どのような働き方をしているのか学生の前で話してもらっています。若いうちからそういう気持ちを持って働いてもらうと、女性医師の負担も軽くなり、辞めずにすむのではないかと考えています。

高橋知事

皆様のような取組が、北海道内に広がることを期待しています。